

「琉球王国」とは？

現在の沖縄県は、かつて「琉球」と呼ばれた一つの独立国家でした。現在の沖縄本島を中心に、北は奄美諸島、南は八重山諸島までが王国の最盛期に治めた地域です。

12世紀頃から沖縄本島では各地に按司（あじ）と呼ばれる豪族が現れ、南山（なんざん）、中山（ちゅうざん）、北山（ほくざん）という3勢力が争う“三山時代”となります。1429年、尚巴志（しょうはし）がこれを統一して、琉球王国が誕生しました。最初の王はクーデターで幕を閉じるものの、すぐに第二尚氏王統が開かれて、王国は1879年まで約450年間続きました。

王家は首里城に居城。首里城は王宮であると同時に政治を行う機関・首里王府で、城内では様々な儀式や祭祀が執り行われました。王族の身の回りを整え、行事を遂行する中で多くの芸能や美術工芸が発展していきました。

外交の視点から見ると、琉球王国は中国や東アジア諸国との貿易によって繁栄したと言えます。10～14世紀の東アジアでは、各国の商人たちによる貿易が盛んに行われていました。中でも明（中国）は自国を中心とした国際秩序の構築を目指し、朝貢して忠誠を誓う国に対してのみ交易を許しました。ここに加わった琉球は、優れた中国商品を大量に輸入し、それらを近隣諸国へ輸出すると同時に、中国へ持ち込むための商品を日本や東南アジアから調達するなど、東アジアの中継貿易国として重要な役割を果たしました。

小さな国だった琉球王国は、日本・中国・朝鮮・東南アジアの各地の文化を巧みに融合させ、独自の文化を生み出しました。さまざまな由来を持つ文化的要素をミックスさせた文化芸術は、現在も沖縄の人々の生活に深く根ざし、心のよりどころになっています。

琉球舞踊



現在の沖縄県を中心に継承される舞踊の総称で、18世紀頃から琉球王朝時代に、琉球王やその国賓の前で踊られた「古典舞踊（宮廷舞踊）」と、明治時代以降に庶民の風俗や習慣を題材にして生まれた「雑踊（ぞうおどり）」に大別されます。

「古典舞踊」は振り付けがあり、衣装もほぼ決まっています。音楽が始まると踊り手は舞台の下手より登場し、中央で踊り、終わると下手に戻ります。これは琉球舞踊がお座敷で踊られていたことに由来するもので、宴の席でお酒を味わいながら踊りをめぐるというのが本来の楽しみ方でもあります。

琉球舞踊はその格式の高さにより、2009年に国の重要無形文化財に指定されました。今回の公演では、「日傘踊り」という演目をご覧ください。

「雑踊（ぞうおどり）」は1879年琉球処分により、琉球王朝の崩壊と共に禄を失った舞踊家たちが、町に出て民衆を相手に芝居小屋での興行を営むようになり発展しました。古典舞踊で用いられた繁栄と発展といった題材や、きらびやかな衣装とは対照的に、男女の愛情や、豊作豊漁を願ったものが多く、衣装も芭蕉布や緋（かすり）といった、庶民の生活で使われていたものを取り入れます。生き生きとして自由でリズムカルな演目が多く生まれ、多くの人々を魅了してきました。今回の公演では、「谷茶前（たんちゃめ）」という演目をご覧ください。

獅子舞



獅子舞は、東アジアで見られる伝統芸能の一つで、1世紀頃の中国が発祥とされています。沖縄の獅子舞は、中国から伝承されたという説が有力ですが、木彫りの頭や胴体の作りから、インドやインドネシアなどの影響も受けていると考えられています。本土の獅子舞とは形大きさ共に大きく違い、胴体もずっしりと大きく、迫力のある動きと愛嬌のある動きが特徴です。獅子舞に噛まれると「無病息災」「招福驅邪」などのご利益があると言われていています。

琉球古武術



琉球の古武術は、「徒手空拳術」と「武器術」の2つに分かれており、前者を空手と呼び、後者を琉球古武術と呼びます。琉球古武術は八種の武器（棒・サイ・トンファー・ヌンチャク・鎌・鉄甲・ティンバー・スルジン）を使用し、武器毎にそれぞれの特徴があります。琉球古武術が歴史に現われ始めたのは今から700年程前で、本土は鎌倉南北朝時代。17～19世紀には隆盛を極めたが、

時代の変遷と共に継承者も徐々に減り、衰微の一途を辿りました。この状況を憂慮した大正初期の先人達は、この琉球古武術の保存と振興に努めました。

三線音楽



三線（さんしん）は、中国の三弦をモデルとした楽器であり、14世紀頃に福建省からの移民によって伝えられたと言われています。三線は宮廷音楽として発展してきましたが、三線に使用されている素材は高級なものであり、なかなか手に入るものではありませんでした。三線は琉球士族のたしなみとされるようになり、中国や日本の大使をもてなすための琉球行事に欠かせないものとなりました。日本にある三味線は、この三線が祖先であると言われています。

エイサー



エイサーは、旧盆の最終日に行われる、祖先をあの世へ送り出す念仏踊りのことです。1603年、琉球王国時代に浄土宗が伝わり、葬儀や法事でニンプチャー（念仏者）が念仏歌を歌って霊を供養するようになったのが、エイサーの原型とされています。その後1956年に始まった「全島エイサーコンクール」をきっかけに、振り・構成・隊列・音楽に魅せる要素も取り入れられ、見に来た人を楽しませる芸能の要素が強くなったと言われています。

カチャーシー



カチャーシーとは、テンポの速い沖縄民謡に合わせて、両手を頭上に挙げて手首を回しながら左右に振る踊りです。お祝いごとやお祭りに欠かせない踊りで、場が賑わうと自然と踊り始めます。男性は手を握るグー、女性は手を開いたままのパーで踊ります。男性は家庭に幸せを持ち帰り絶対に離さないために手を握りしめ、女性は家庭に幸せを持ち帰りそれを他の人たちにもお裾分け

するために手を開いているのだそう。幸せをお裾分けしながら自身の幸せも逃げないよう、開いた手の指の間はしっかりと閉じるようにと言いつづけています。

琉球伝統歌舞集団 琉神 Ryujin



2001年、沖縄県にて誕生。その後日本の中心である富士の国【静岡】に拠点を写し、国内外に幅広く活動を展開しています。本場沖縄の実力派アーティストの支持を受け、1,000人規模の主催コンサート開催のほか、ユネスコ国際音楽会議に日本代表として出演しています。海外公演の実績は豊富で、ヨーロッパツアー、南米ツアー、ジョージア、台湾、韓国、夏川りみ台湾公演帯同などがあります。

ほか F1 鈴鹿 GP パドックでのステージや、静岡県文化出前講座登録、全国的にも珍しいエイサー教室の開催など、積極的に活動の場を広げています。

代表：鈴木一行 Iko Suzuki



静岡県静岡市出身、大学進学とともに沖縄へ。沖縄では米軍基地等でロックライブなどの音楽活動を行っていたが、沖縄の文化、音楽に目覚め、エイサー、三線を始める。エイサーでは地元のプロ団体に所属し、リーダーとして活躍する。また、その時に現琉神メンバー大城と亀川と知り合う。自分自身の表現と芸術性を高めるために同団体を独立。2001年「エイサーチーム琉神」を立ち上げる。全国活動を行うために日本の中心地、生まれ育った静岡県に帰郷。静岡市を拠点とする。現在、主宰としてチームのとりまとめ、舞台構成、若手の育成等を行いながら、下根期のアーティストとしても琉神の中心として活躍している。

主な活動歴

- 2005年 古謝美佐子 全国コンサート帯同
- 2006年 新宿コマ劇場「夏川りみカーニバル」出演
- 2007年 BS日本のうた 夏川りみと共演
- 2008年 フジテレビ MUSIC FAIR 三線で出演
F1日本GPパドッククラブ出演 富士スピードウェイ、鈴鹿サーキット
- 2009年 ヨーロッパツアー・ユネスコ国際音楽会議出演（7カ国8都市10公演）
チュニジア・ハンガリー・スイス・ドイツ・ルクセンブルク・フランス・イタリア
- 2012年 台湾台南市、十鼓節日本代表チーム出演（2都市10公演）
琉神 LIVE「ワシウムイ 2012 静岡公演」清水マリナート
第2回 AKB 紅白対抗歌合戦紅組オープニング共演
- 2013年 韓国密陽「演劇祭」10公演
- 2013~2018年 チカラ 2013 静岡本公演 平成24年度グランシップ提携公演事業
- 2015年 1~2月 全国にっぽん演歌の夢祭り 名古屋・大阪・福岡・仙台・埼玉公演
コープさっぽろ 真南風の響き 北海道公演 琉神&夏川りみ
- 2016年 日本テレビ「THE MUSIC DAY」海の声 桐谷健太共演
和リーグ南米ツアー エクアドル・パナマ
南米ツアー凱旋公演「ワシウムイ 2016」静岡市清水文化会館マリナート
- 2017年 夏川りみ台湾公演共演
富士山子ども芸術大学エイサーワークショップ開催
F1日本GPパドッククラブ出演 鈴鹿サーキット
和リーグ ジョージアツアー・南米ツアー（メキシコ・グアテマラ・パナマ・コスタリカ）
- 2018年 台湾台南市、十鼓節
和リーグ 中南米ツアー（エクアドル・ベネズエラ）
夏川りみ台湾公演共演
大阪琉球フェス 新宿沖縄音楽フェス 新歌舞伎座真夏の沖縄音楽フェス 出演
- 2018~2019年 琉神コンサートツアー、F1日本GPパドッククラブ出演 鈴鹿サーキット
- 2019年 琉神コンサート 富岡市民文化センター 福島県三春交流館・ぎふ清流文化プラザ
富士吉田市民文化会館・富田林市民会館
- 2019年 琉球フェス 滑川・大阪ベイトワ
沖縄音楽フェス 新宿文化センター 新歌舞伎座

令和4年度 東京都立武蔵野北高等学校 芸術鑑賞教室

琉球伝統歌舞集団

琉神 Ryujin



期日：令和5年3月16日（木）

会場：東京都立武蔵野北高等学校 体育館

時間：13:30開演（13:00開場）



主催：東京都立武蔵野北高等学校 企画制作：東京音楽鑑賞協会